

個別最適な学びについて

須坂市立豊洲小学校 の取組

「自分で学習方法を選択し自分のペースで学ぶ」

～「教師が教え揃える」授業から「子供に委ね 支える授業」への転換～

「自律して学ぶ力を育てる必要性を強く感じたのは、分散登校時、自分で学習を進めることに自信がもてない不安を吐露する子供たちの声からでした」（学校長）

【取組の経過】

- ・上智大学 奈須正裕教授から受けた「子供たちが自分で学習方法を選択し自分のペースで個別最適に学ぶ」研修を生かし、個別最適な学びへの取組を全学級で広げていった。

【取組の継続により見られた子供の学びの様子】

- ・6年生の社会の幕末から明治初期の歴史の流れをまとめる場面で、自分で学習方法を選択し、自分のペースで学ぶ時間を設定した。
- ・多くの児童は、全体の学習で興味をもった一人の人物について1人1台端末等を活用しさらに詳しく調べた。
- ・そんな中Aさんは、歴史の流れを「すごろく」にまとめることを考えつき、これまでの資料を基に作成しながら、この時代の歴史の展開への理解を深めていった。
- ・さらに作成した「すごろく」を他の児童と楽しみ、互いが調べた人物の情報を語り合う姿が見られ、この時代の人物の働きについて互いに理解を広げたり深めたりしていった。



【取組の成果】

- ・子供に、自ら課題を見だし学ぶ力が着実に育ってきている。
- ・教師が、目の前の子供の学習状況に合わせた授業をより意識するようになってきている。

「個別最適な学び」とは

子供一人一人が自身の興味・関心などに応じて、探究課題や情報収集、まとめ方などの学習活動や学習課題を自らの学習が最適となるように調整する学び。

教師は、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法や教材、学習時間等の柔軟な提供・設定を行う。

令和3年1月に示された「令和の日本型学校教育の構築を目指して」において、目指すべき新しい時代の学校教育の姿として「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」が提言された。

「個別最適な学び」の推進のために

- ・これまで以上に子供の成長やつまずき、悩みなどの理解に努める
- ・個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援する
- ・子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していく

「個別最適な学び」の留意点

- ・「孤立した学び」に陥らないよう、「協働的な学び」と一体的に充実することが重要
- 探究的な学習や体験活動等を通じ、子供同士で、あるいは多様な他者と協働する
- 他者を価値ある存在として尊重

多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成する **個別最適な学び**

往還

子供たちの多様な個性を最大限に生かす **協働的な学び**

幼保小接続について ～松本市立明善小学校と校区の園の取組～

幼保小連携が求められる背景

幼保小間での交流行事や職員同士の連絡会などの連携が図られる一方で、「小学校から教育がスタートする」という誤った考え方のもと、園での生活が小学校への準備期間ととられたり、入学後に基本的な生活習慣を身に付けさせようと画一的な指導が行われたりする傾向がある。

明善小学校で
大切にしていること

安心感

入学してくる子供たちが、安心できる場に



園の環境に寄せた教室環境



小学生として頑張ることを
無理なく加える

受容

入学してくる子供たちを、ありのままの姿で受け入れる

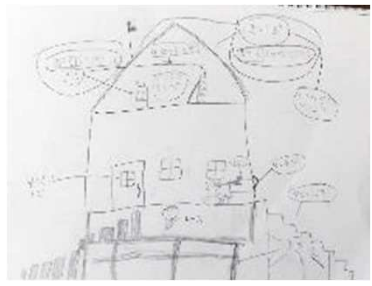
子供は「自ら学ぶ存在」ととらえ、教師が学習を引っ張らない
子供の発想を認め、取り上げ、共感する

明善小学校区の取組

遊びノート (園)

学びノート (学校)

小学校と校区の園で、自由に記入できるノートを一人ずつ配布
子供の自由な表現の中から、その子の興味・関心や、学びの傾向性を捉え、子供理解を進める



子供の思いを読み取る
("秘密基地を作りたい"という願い)



教科等の学習に生かす
(生活科で実際に活動)



園では、遊んだことや面白かったことを表現



小学校では、生活科を中心に、取り組んだことや発見などを表現



園小の職員でノートを見合う

園小接続部会の立ち上げ

園から送付される幼稚園指導要録・保育要録の読み込みや遊びノートと学びノートの読み比べにより一人一人の育ちを把握



園での研究保育への参加 夏休み中の保育参観

遊びの場面を園小職員で一緒に見ることで子供の学びの姿を共通理解



園児を招待しての演奏会

園の職員だけでなく、5歳児も1年生の姿を知ること、見通しや憧れをもつ

【小学校の幼保小連携を通じた成果】
○幼保から小学校まで学びの姿を連続的に捉えることにより、子供の理解が深まっている。
○児童は、幼保での学びを認めてもらいながら、安心して小学校の学校生活に向かっている。

小中一貫教育の取組 ～諏訪市の実践～

- 小中一貫教育には、義務教育学校と小中一貫型小・中学校（施設一体型、施設隣接型、施設分離型）がある。
- 義務教育学校は、学校長が一人で一つの組織。
※信濃小中学校、美麻小中学校、根羽学園、檜川小中学校の4校
- 小中一貫型小・中学校は、小中それぞれに学校長を配置し、別組織が連携する。

未来の諏訪を創る9年間の人間教育 ～“自らを拓き、未来を生きる”子供を育てる～

小学校と中学校で、共通する「9年間の一貫した教育目標」を設定した上で、「9年間の系統性・体系性に配慮した小中一貫カリキュラム」を編成し、児童生徒の成長を支える仕組みを整える

上諏訪小学校・ 上諏訪中学校の取組

系統性を意識したカリキュラムの工夫

複数の目で小・中の職員が子供たちとかかわる

異年齢集団での学習や交流

諏訪を探究的に学び、諏訪に生きる誇りと志を育む

地域協働の学校づくりを進化・発展

令和3年4月より東部地区の上諏訪小学校と上諏訪中学校において、施設隣接型の小中一貫教育に取り組んでいる。



上諏訪小学校



上諏訪中学校

上諏訪小学校・上諏訪中学校の取組から

■ゆるやかな接続

○小学校と兼務する中学校の「数学・英語・家庭科」の教師が6年生の授業を担当

- ・専門の教師による授業を小学生から経験
- ・小中のつながりを意識した授業の実践

○中学校の教員が児童の様子を確認、実態を把握する機会を設ける

- ・早期の実態把握
- ・小中の連携を密にした指導・支援の実現

■研修を通じた小中の教職員同士のつながり

○互いの授業参観を通じた教育研究の推進

- ・小中を貫く、各教科等の本質に迫る授業観を培う

○指導内容の系統性に着目した9年間のカリキュラム研究の実施

- ・中学校での学習のつまづきを基に、小学校での指導の工夫

■異学年交流による思いやりの心を育てる取組

○児童会・生徒会の交流
○夏休みに小学生の勉強を中学生が支援

- ・相手意識をもった自主的な活動の広がり
- ・自分の役割を考えることができる

【小中一貫型小・中学校（施設隣接型）の強み】

○小中はそれぞれ独立しながら、カリキュラムや教員間の連携により子どもの成長を支えている